令和4年度　文化財公開展

―古代の和泉国を求めて―

12 月 10 日（土）

（集合）南海松ノ浜駅　西側ロータリー

①宿井川　～　②紀州街道③助松村境石造物群

～④専称寺　～　⑤助松神社⑥布引の道

～南海助松駅（解散）

泉大津市教育委員会・泉大津市文化財保護委員会

古代のいずみおおつ

古代の泉大津市は和泉国と呼ばれた地域でした。ここでは多くの人びとが暮らし、多くの史料などに本市地域のことが記されています。

海岸には国府直属の国ノ津が置かれ、都との交流の拠点となっていました。この港は、『土佐日記』『更級日記』に「小津の泊」「大津という浦」という名称で記されています。海を舞台にした言い伝えなども伝わっており、人びとと、海とのつながりが深かったことがわかります。

現在、市街地化が進み、いにしえの姿を伺うことは難しくなってきていますが、いまなお残る古代の泉大津の姿をご紹介します。

国郡全図　和泉国（部分）
『日本地図選集　文政天保國郡全図並大名武鑑』より

①宿井川（やどいがわ）

所在　泉大津市松ノ浜町二丁目

『日本書紀』によると、神功皇后が忍熊王の反逆を討伐するための進軍の途中で、小竹の宮をおとずれました。この「小竹」を「しぬ（＝ちぬ）」と音をあて、和泉国におかれていた「茅渟の宮」であるとする説があります。海を進軍した神功皇后がこの地に上陸したのが宿井川の河口であったと伝わります。宿井川は、現在の浜小学校の北側を流れる河で現在、堅川と呼ばれる河と比定されています。

「茅渟の宮」は現在の和泉市尾井町にある舊府（ふるふ）神社であるとも言われていますが残念ながら考古学的な確証はありません。

②紀州街道（きしゅうかいどう）

大阪市中央区の高麗橋を起点として和泉地方を縦断し、紀州（和歌山県）に至る道です。泉佐野市下瓦屋道（どう）の池で熊野街道と合流するまでの区間 48.8Km を指します。五つの旧街道のひとつで、紀州藩からの参勤交代や泉州地域の交易ルートとして盛んに利用されました。

街道沿いには、参勤交代の際に紀州藩の大名が休憩した助松本陣田中家住宅（国登録文化財）があります。

紀州街道と田中家住宅

③助松村境石造物群（すけまつむらさかいせきぞうぶつぐん）

所在　助松町三丁目 209 番地、助松 936 番地

松之浜曽根線と紀州街道の交差点を北に入った紀州街道沿いに位置します。敷地北端にある地蔵堂内には延命地蔵 1 体と石仏 2 体が祀られています。敷地内には西国三十三度供養塔 3 基、徳本上人名号碑 1 基が並んで建てられ、紀州街道を挟んで向かい側には六十六部供養塔があります。

西国三十三度供養塔のうち 2 基は、文化 5(1808)年と弘化 5(1848)年の建立銘が残ります。地域では地蔵堂を含めたこれらの石造物群を総称して「ホウケント」と呼称されており、「宝篋印塔」の転訛ではないかと考えられます。石造物群は地域信徒で構成する延命地蔵尊世話人会の手によって管理されています。

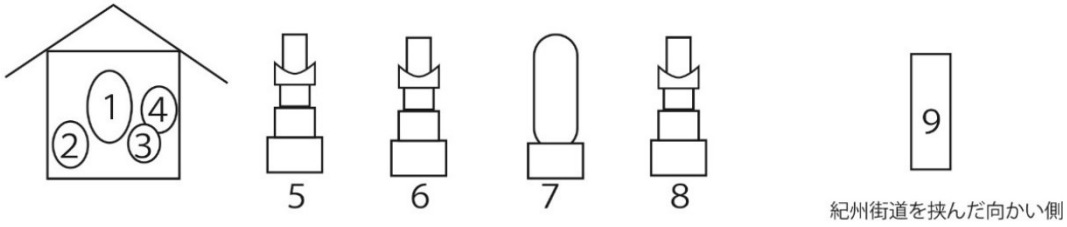
助松村境石造物群

助松村境石造物群詳細一覧

No.	名称	種別	形式等	総高(cm) ※台座除く	最大幅(cm)	最大厚(cm)	材質	持物印相	銘	備考
1	延命地蔵	地蔵立像	肉彫り 舟形光背	高さ140.0	76.0	58.0	花崗岩	錫杖	〈表面〉 法界　願主　四國偏禮二十一遍 (種字カ(地蔵)) 萬霊　大行者難波祈道惠信 〈裏面〉 (銘なし) 〈台座〉 施主 當村 五穀豊穣 村中安全 山上 與右衛門	台座：62.5cm 産神問答譚が伝わる
2	地蔵石仏	地蔵立像	肉彫り 舟形光背	50.0	26.0	12.5	砂岩	錫杖**瓔**	〈表面〉 谷野陽司子 弘光 勝義 〈裏面〉 昭和三十四年八月吉日	
3	地蔵石仏	地蔵坐像	肉彫り 舟形光背	26.5	18.8	11.0	砂岩	定印**瓔**	〈表面〉 [　　] (種字カ(地蔵)) 五月十二日 〈裏面〉 (銘なし)	
4	地蔵石仏	地蔵立像	肉彫り 舟形光背	49.7	23.8	15.5	砂岩	錫杖**瓔**	〈表面〉 [上部欠]ユ念童女灵 (種字カ(上部欠)(地蔵)) 文化元子四月十六日 〈裏面〉 (銘なし)	右上部欠損
5	宝篋印塔	宝篋印塔		295.0	127.7	128.3	花崗岩		〈塔身部上部〉 (金剛界四仏種字有)「キリーク(阿弥陀如来)」(正面西)、「アク(不空成就如来)」(正面左)、「ウン(阿閃如来)」(裏面)、「タラーク(宝生如来)」(正面右) 〈塔身部下部〉 (正面)西國三十三度供養塔 (正面左)御室御所参入　先達五人之内　大願主覺深 (裏面)文化五戊辰年三月日 (正面右)經曰　以一香一華於此塔禮拝供養滅八十億劫生死重罪 〈台座部　正面左〉 供養|施主 山上 與右衛門 寶塔施主 田中 直右衛門 中 左右衛門 松内 物助 〈台座部　裏面〉 世話人 [　]右ヱ門 重良兵ヱ 大左ヱ門 粂次郎 喜兵衛 次郎兵ヱ 利兵衛 徳兵衛 [　]ヱ門 彦左ヱ門 惣兵衛 萬助 [　]右ヱ門 〈台座部　正面右〉 口右ヱ門 口兵衛 與兵衛	相輪部欠 基礎部無く、 返花座部の上に蓮台有。
6	宝篋印塔	宝篋印塔		278.0	124.3	122.5	砂岩		〈塔身部上部〉 (金剛界四仏種字有)「キリーク(阿弥陀如来)」(正面西)、「アク(不空成就如来)」(正面左)、「ウン(阿閃如来)」(裏面)、「タラーク(宝生如来)」(正面右) 〈塔身部下部〉 (正面)西國三十三度供養塔 (正面左)御室御所参入　先達五人之内　大願主覺心　弘化五申歳三月 (裏面)空譽圓觀休怡法子　簾節貞教信女　清譽浄圓禪定門　觀譽法道覺圓禪定門　浄譽貞光清月禪定尼　法譽轉輪正善禪定門　聖譽惠輪智法禪定尼　覺譽正源信女　正譽智了妙源禪定尼 (正面右)經曰　以一香一華於此塔禮拝供養滅八十億劫生死重罪 〈塔身部〉 (金剛界四仏種字有)「キリーク(阿弥陀如来)」(正面西)、「アク(不空成就如来)」(正面左)、「ウン(阿閃如来)」(裏面)、「タラーク(宝生如来)」(正面右)	相輪部欠 基礎部無く、 返花座部の上に蓮台有

No.	名称	種別	形式等	総高(cm) ※台座除く	最大幅(cm)	最大厚(cm)	材質	持物印相	銘	備考
									〈台座部　正面左〉 供養施主 山上與右ヱ門 仲久左ヱ門 山上與兵衛 [　　] [　　] [　　] 兵衛 [　　] 山上七左衛門 〈台座部　裏面〉 世話人 田中角右ヱ門 田中覺左ヱ門 山ノ南右ヱ門 千原屋(カ)利兵衛 中　　久三郎 山上　宗兵衛 山ノ　左ヱ門 山ノ　五口右ヱ門 宇八郎 千原屋利八良 庄右ヱ門 久右ヱ門 〈台座部　正面右〉 文右ヱ門 伊(カ)兵衛 角兵衛 太平治 徳三郎 千　仁兵衛 仁平治 三右ヱ門 十良兵衛 彦左ヱ門 九右ヱ門 辻　惣兵衛 治郎左ヱ門	
7	徳本上人供養塔	名号碑、 供養塔	角柱形	268.6	138.6	107.5	花崗岩		〈正面〉 南無阿弥陀佛 徳本(花押)	
8	宝篋印塔	宝篋印塔		233.2	115.3	115.3	砂岩		〈塔身部上部〉 （金剛界四仏種字有）「キリーク(阿弥陀如来)」(正面西)、「アク(不空成就如来)」(正面左)、「ウン(阿閦如来)」(裏面)、「タラーク(宝生如来)」(正面右) 〈塔身部下部〉 （正面）西國三十三度供養塔 （正面左）御室御所参入　先達五人之内　大願主覺山 [　]月十八日 （裏面）［判読不能］ （正面右）經日　以一香一華於此塔禮拝供養滅八十億劫生死重罪 〈台座部　正面左〉 供養施主 山上右ヱ門 山上久左ヱ門 山上與兵ヱ 寶塔施主 大坂 [　　] 和口屋(カ)助口 高石北村 山川七左ヱ門 [西口(カ)]村 高田[　　] 〈台座部　裏面〉 （銘なし） 〈台座部　正面右〉 （判読不能）	相輪部欠 基礎部無く、 返花座部の上に蓮台有
9	六十六部供養塔	名号碑、 供養塔	角柱形	135.2	54.0	53.2	花崗岩		〈正面〉 南無阿弥陀佛 〈正面左〉 天下和順 奉納大乘妙典日本廻國六十六部供養塔 日月清明 〈正面右〉 [　　]三月五日大□□□玄敬(カ)□ 〈裏面〉 [　]□信　妙正　妙□　正山　□三 [　　]信　自□　千塔　覺應　淨□ [　　]　□□　宗頓(カ)　道意　賢□ [　　]　□□　妙頓　宗泰(カ)　妙頓(カ) [　　]　惠妙　□心　宗□　宗壽	

助松村境石造物群配置図



紀州街道を挟んだ向かい側

④専称寺（せんしょうじ）

山号　即往山接取
宗派　浄土宗知恩院末寺
所在　助松町２丁目２番18号

　寺伝によると、天正 18(1590)年、黄蓮社玄誉上人の開祖と伝わります。高石市綾井の専称寺、堺市専称寺とともに泉州三専称寺のひとつです(『泉大津市史』)。
　現在の本堂は昭和47(1972)年に鉄筋コンクリート造にて再建されたものです。旧本堂は、解体時に見つかった棟札によると、明和 9(1772)年の建築と判明、天保 3(1832)年に一部改築されているようです。解体の際に天井から納められ見つかった柱様の材木のなかから、涅槃図と観経曼荼羅(かんぎょうまんだら)が見つかっています。
　本尊の阿弥陀如来は、恵信僧都作と伝えられています。

⑤助松神社（すけまつじんじゃ）

所在　泉大津市助松町

祭神は建甕槌命（たけみかづちのみこと）・経津主命（ふつぬしのみこと）・天児屋根命（あめのこやねのみこと）・ 比咽大神（ひめおおかみ）で、 後に菅原道真が合祀されます。創建は明らかではありませんが、神護景雲（767～770 年）の頃とされ、又『泉州文化資料』では、「称徳（承徳の誤りか）年間といわれるも文献なし」と記されています。明治7（1874）年の記録によれば、もとは小さな祠であったのを元亀2（1571）年に田中遠江守が社地を寄付して村社となったと記されています。

本殿は、二間社流造で柱間を偶数にし、身捨柱は面取角柱とするなど、類例のない珍しいもので、拝殿から連絡した覆屋に建てられています。 建立年代は、紅梁や実肘木の絵様から元禄年間であると推定されます。

境内には、八幡神社・金毘羅神社などの社が建てられ、天和 2 年（1682）銘の鳥居や延宝 8 年（1680） 銘の手洗鉢、 元禄 7 年（1694） 銘の百度石が残っています。

助松神社の文化財　　板面著色 馭馬図衝立

種別 市指定有形民俗文化財（平成 16 年 3 月 22 認定）
形状 スギ材を上下に 3 枚重ねて 1 枚の板としている
時代 江戸時代（宝暦 14(1764)年）

本品は衝立ですが、元は篇額形式の絵馬であったようです。絵馬に脚台を付け衝立に仕立てたと思われます。背面は縦に 2 本の溝が掘られ、その溝に補強のため 2 本の桟を嵌め込んで打付けています。2 本の桟には同位置に切り込みの穴があり、その穴を利用して絵馬として懸けられていたようです。

画面には、立烏帽子に水干、括り袴姿の神人とおぼしき二人の御者と白馬が描かれています。御者のうち一人は、手綱をひいて躍動する白馬を御し、その右側には松、竹、 梅が描かれています。馬の胴には地模様に「梅鉢紋」のある布帛が被せられ、2 本の紐が大きく結ばれています。

馬は古くから乗り物として貴重でしたが、神の乗り物としても神聖視され、神社に奉納されました。本図には「梅鉢」 紋が見られることから、 助松神社の一祭神である天神(菅原道真)に奉納されたことが窺われます。

衝立背面の下部ほぼ中央部には奉納した連中の名が記されています。
「恵林 善右衛門 弥右衛門 久次郎 与兵衛 吉三郎・ 四良右衛門 藤助吉良兵衛 三良右衛門 清兵衛 清左衛門」

この中で 「恵林」は海蔵寺の住職であり、他の人物の一部は『助松村宗門改帳』、『助松 村蓮正寺分宗門改帳』及び助松村関係文書で名前が見られます。この絵馬は、宝暦 14(1764)年に、地元 12 名の連中が助松神社に奉納したものであ り、市内最古の板絵として貴重なものです。

⑥布引（ぬのびき）の道（みち）

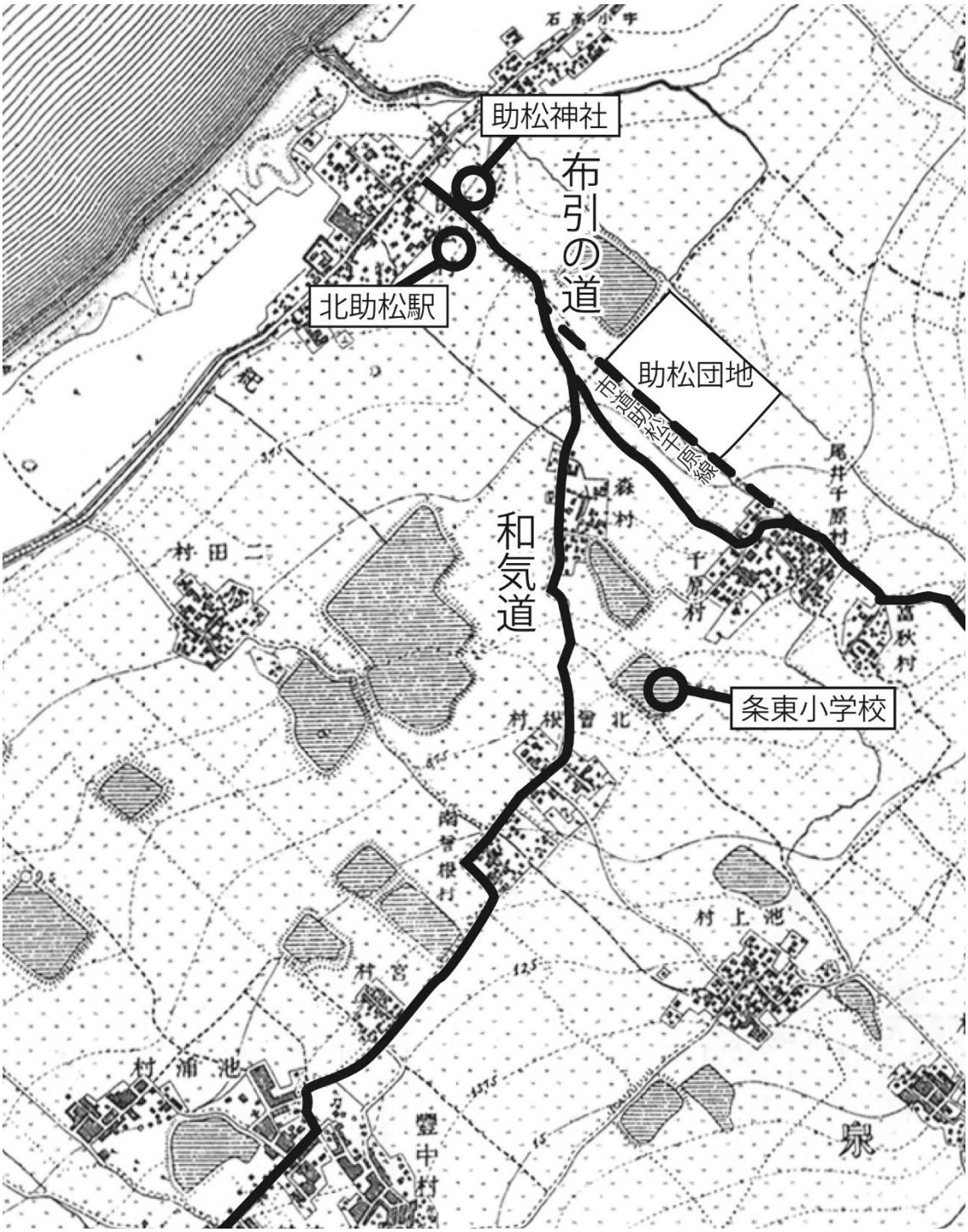
助村より東（山側）へ向かい千原・富秋（旧信太郷）を通過して和泉市聖（ひじり）神社に至る道は、かつて「布引の道」と呼ばれていました。

道の名は、「信太大明神（別称聖神社）が助松の浜から上がってこられた際に 信太郷まで布を引いた」との伝説に由来しています。この道は、幅八尺（約 2.4 メートル）の大きな道であったとの伝承があり東西を結ぶ主要な古道であったと思われます。

現在、北助松駅から東に真直ぐに延びる市道助松千原線は、かつて条里制に基づく坪と坪を仕切る農道であったところを、大正 4（1915）年に道幅拡張工事が行なわれ、さらに昭和 36（1961）年に助松団地造成に伴い、ほぼ現状の状態となりました。

拡幅工事のおこなわれる以前の、明治 19（1886）年地図を見ると、布引の道は助松村字楠木（現さつき通り） 付近で南に振れ、その後道が二つに分岐します。その森村に向かう道は「和気道」で、他方の千原村の集落に向かう道が「布引の道」であると考えられます。

いにしえの「布引の道」は現在、脇道となりましたが、住民の生活道として利用され続けています。



明治 19 年陸軍地図に「布引の道推定位置」を追記